E1

モークワン・カドゥー語東部方言における有声阻害音*

藤原敬介（京都大学）

1　はじめに

モークワン・カドゥー語（Mawkhwang/Mokhwang Kadu）とはチベット・ビルマ語派（Tibeto-Burman）ルイ語群（Luish/Asakian）のうちカドゥー諸語に属する言語である。カドゥー諸語はいずれもビルマ・ザガイン管区（Sagain Division, Burma）ではなされている。

Scott［1900:570］はカドゥー民族を次の六種に分類する。すなわち（A）Mawteik、 (B) Mawkwin、 (C) Sigadaung、 (D) Sinan、(E) Gyodaung、 (F) Ganan である。このうち（F）以外はすべて地名に由来する。そして（A）、（B）が民族意識としてもカドゥー人に属し、カドゥー語をはなす。（C）と（D）については、おそらくはモークワン・カドゥーの一種であったけれども、現在ではすでに話者がいない。（E）は、おそらくはモーテイッ・カドゥーの一種であったけれども、すでに話者がいない。（F）は民族意識としてはガナン人に属し、ガナン語をはなす。

カドゥー諸語にかんする先行研究としては、セットー・カドゥー語（あるいはモーテイッ・カドゥー語）については Brown［1920］、Sangdong［2012］、藤原［2013］、ガナン語については藤原［2012a］などがある。モークワン・カドゥー語については、カドゥー諸語のなかにおける位置を検討した藤原［2015］がある[注1]。

本発表では、まずモークワン・カドゥー語の方言分類をおこなう。そして、有声阻害音が異音であり一般的には音素的ではないモークワン・カドゥー語にあって、東部方言においては有声阻害音が音素的であることを提示する。そして、音素的となった原因について考察する。

2　カドゥー語諸方言の分類

モークワン・カドゥー語諸方言を分類する前に、カドゥー語諸方言を簡単に分類しておく。なお以下の記述は藤原［2015］と重複する。

Sangdong［2012:17–18］はカドゥー民族の伝承にもとづく移住の歴史を根拠として、カドゥー語の方言分類をおこなっている。そしてカドゥー語にはもともとはモークワン・カドゥー語があり、そこからモークワン・カドゥー語とモーラン/モーカー・カドゥー語とにわかれ、さらにモーラン/モーカー・カドゥー語からセットー/モーテイッ・カドゥー語とにわかれたとする。

発表者がこれまでに収集したカドゥー語諸方言の資料からは、カドゥー語の方言は大別して次の三種にわかれる。すなわち（A）モーテイッ・カドゥー語、（B）モーラン・カドゥー語、（C）モークワン・カドゥー語である。さらにモーテイッ・カドゥー語はモーテイッ方言とセットー方言に、モーラン・カドゥー語はモーラン方言とモーカー方言に[注2]、モークワン・カドゥー語は南部、北部、西部、北西部、東部方言にわかれる。

本発表では、特にことわらないかぎりは、モーテイッ・カドゥー語の代表としてセットー方言に属するタコタ方言、モーラン・カドゥー語の代表としてモーラン方言、モークワン・カドゥー語の代表として西部方言をあつかう。

---

* 主要語句: チベット・ビルマ語派、ルイ語群、モークワン・カドゥー語、方言研究、有声阻害音。

注1 カドゥー人の民族誌をあつかった本のなかで方言差についてふれられることがある。ただし、言語学的な分析はなされていない。

注2 モーランに属するとおもわれる村はおよそ十、モーカーは五つ。数カ村で予備的調査をした範囲では、方言間の差異はあまりないようである。なおモーラン・カドゥー語地域では独自の文字が近年作成され、一部で普及しつつある。

2.1　音対応

モーテイッ・カドゥー語、モーラン・カドゥー語、モークワン・カドゥー語をわかつ特徴的な音対応は（1）のようにまとめられる。比較のためにルイ祖語（Proto-Luish: PLu と略す; 藤原［2012b, 2014］による）とガナン語の形式もあげる。音対応からは、おおむねモーテイッ・カドゥー語とモーラン・カドゥー語が共通し[注3]、モークワン・カドゥー語とガナン語とが共通しているとわかる。

(1) a. PLu *ɓ の対応: モーテイッ p、モーラン b、モークワン m、ガナン m
b. PLu *ɗ の対応: モーテイッ t、モーラン d、モークワン l、ガナン l
c. PLu *khri: モーテイッ c^hi, モーラン c^hi, モークワン hi, ガナン hi
d. 声調体系: モーテイッ H/M/L/F、モーラン H/M/L/F、モークワン H/M/L、ガナン H/M/L

具体例は（2）のとおりである。入破音をのこすチャック語（Cak; Huziwara［2016］による）の形式もあげておく。

(2) a. ‘eggplant’ PLu *ɓok; Cak ɓəʔóŋsɨ, モーテイッ pauʔpɔɕi, モーラン bauʔbɔɕi, モークワン mouʔmɔs^{h}i, ガナン mouʔmɔs^{h}i
b. ‘wrap’ PLu *ɗip; Cak ɗiʔ, モーテイッ tep, モーラン dep, モークワン lep, ガナン lɛp
c. ‘wash (clothes)’ PLu *khri; Cak hrɨ, モーテイッ c^hi, モーラン c^hi, モークワン hi, ガナン hi

2.2　文法形式の対応

カドゥー語諸方言のあいだで語彙はほぼ共通している。ただし、（3）にしめすように文法形式の一部に差異がみられる。

(3) a. ‘LOCATIVE’ PLu *=a; Cak =ʔa, モーテイッ =pe, モーラン =p/be, モークワン =peiʔ, ガナン =ʔá
b. ‘ALLATIVE’ PLu *—; Cak =ʔa, モーテイッ =pà, モーラン =p/bà, モークワン =pà, ガナン =ʔà
c. ‘NEGATIVE PREDICATE MARKER’ PLu *—; Cak =ɓɯʔ, モーテイッ =ʔá, モーラン =ʔá, モークワン =ʔɔ́ ～ =ʔɔ̀, ガナン =ʔó ～ =ʔò

2.3　語彙の対応

カドゥー語諸方言のあいだで語彙はほぼ共通している。ただし、（4）にしめすような差異が一部にみられる。ここでもモーテイッ・カドゥー語とモーラン・カドゥー語とが共通し、モークワン・カドゥー語とガナン語とが共通することがおおい。

(4) a. ‘this’ モーテイッ ʔənâ, モーラン bên, モークワン məka, ガナン məka
b. ‘knee’ モーテイッ tət^{h}u, モーラン tət^{h}u, モークワン təhouʔ, ガナン təhuʔ
c. ‘heel’ モーテイッ tatənôuʔ, モーラン tatənôuʔ, モークワン tət^{h}ú, ガナン tət^{h}ó
d. ‘loin cloth (male)’ モーテイッ kəs^{h}é, モーラン kəs^{h}é, モークワン ʔəɕí, ガナン ʔəs^{h}í
e. ‘beautiful’ モーテイッ kətàm, モーラン kədàm, モークワン klàm, ガナン klàm

注3 モーテイッ・カドゥー語とモーラン・カドゥー語をわかつ改新としては、モーラン・カドゥー語において有声閉鎖音類が音素となっている点があげられる。

ただし、モーテイッ・カドゥー語、モーラン・カドゥー語、ガナン語とが共通し、モークワン・カドゥー語がことなる例も確認されている。

(5) a. ‘banana’ モーテイッ s^həlà, モーラン s^həlà, モークワン ʔuɕi, ガナン s^həlà
b. ‘stand’ モーテイッ sap, モーラン sap, モークワン tèiŋ ∼ sap, ガナン sap

タイ系のシャン語[注4]からの借用語にいれかわるか否かで、差異があらわれることもある。(6) はモーテイッ・カドゥー語とモーラン・カドゥー語とが共通し、モークワン・カドゥー語とガナン語とが共通する例である。

(6) a. ‘NOMINALIZER’ モーテイッ =pên (T), ML =p/bên (T), モークワン =kà, ガナン =ká
注 モーテイッとモーランの形式はシャン語 pen^1 ‘be; exist’ を借用。
b. ‘mirror’ モーテイッ sàm, モーラン zàm, モークワン man, ガナン man
注 モーテイッとモーランはシャン語 $tsam^3$、モークワンとガナンはビルマ語の借用。

モークワン・カドゥー語のみがことなる例もある。

(7) a. ‘sandal’ モーテイッ hɛttiŋ, モーラン hɛttín, モークワン təs^hɔ́p, ガナン hɛttín (T)
注 モーテイッ・モーラン・ガナンはシャン語 k^hɛ$p^4$$tin^1$ の借用。
b. ‘speak’ モーテイッ təpáuʔ, モーラン təbáuʔ, モークワン ʔɔ, ガナン təpáuʔ
注 モークワンは赤タイ語 ʔɔɔ^4 からの借用。

3 モークワン・カドゥー語の方言分類

3.1 地理的分布と言語状況

モークワン・カドゥー語は、現在の地理的分布にしたがって南部方言、北部方言、北西部方言、西部方言、東部方言に分類することができる。

伝承によれば、モークワン・カドゥー語の話者はもともとはモークワン地方（南部方言地域）にいた。そこから西部方言地域と北部方言地域とに 1800 年ごろに移住していった。現在では、南部方言地域の話者は日常的にはビルマ語のみをはなす。モークワン・カドゥー語をしっている話者はモークワン村の 70 代の女性のみとなってしまった。その女性も日常的にはビルマ語を使用しモークワン・カドゥー語を使用しないために、かなりわすれている。他のモークワン・カドゥー語地域との交流はない。

東部方言については、ニャウンゴン村に流暢な話者が一人いるのみである。この話者も 70 代の女性である。他の村人はビルマ語をはなす。他のモークワン・カドゥー語地域との交流はない。

北部方言には北から順にアシェーゴン、チャウッタン、タイェッコン、ウェートウッキー、ルウィンジーの五ヶ村がある。このうちウェートウッキーとルウィンジーではほぼビルマ語のみがはなされ、モークワン・カドゥー語をしっているのは 70 歳以上の数名のみである。アシェーゴンとタイェッコンにはカドゥー人と赤タイ人とが居住しており、言語的にはビルマ語化が進行している。カドゥー語には赤タイ語からの借用語が多数みられるものの、赤タイ語をしるカドゥー人はほとんどいない。ただし、アシェーゴンとタイェッコンのカドゥー人には、赤タイ語をしる人も散見される。北部五ヶ村のうちチャウッタンだけが現在もほぼカドゥー人

注4 カドゥー語に隣接するのはシャン語の方言の中でも赤タイ語である。ただし、筆者の手許には赤タイ語の資料があまりない。そこで、特にことわらないかぎりはシャン語の形式で代用する。本発表におけるシャン語の形式は Sao Tern Moeng［1995］をもとにした SEAlang Library Shan dictionary（2018 年 7 月 30 日確認）による。

のみが居住する村であり、村人はほぼ全員がモークワン・カドゥー語とビルマ語の二言語使用者である。北部方言の話者は、全体としては千人ほどではないかとおもわれる。

西部方言には東から順にパーピンカン、ウェーマンコー、ナウンコッ、ナウンカン、マンナーの五ヶ村がある。この五ヶ村はビルマ語で西部五ヶ村（Anauktan Nga Ywa）としてしられる。いずれの村人もビルマ語とカドゥー語の二言語使用者である。赤タイ語をしっている人はいない。西部方言の話者は、全体としては二千人ほどではないかとおもわれる。西部方言は地理的にみてもガナン語に隣接しており、言語的にもガナン語に類似する面がある。だから他のモークワン・カドゥー語話者からでさえ Ganan-Kadu とよばれることがある。

北西部方言についてはテーガバッ村のみがある。この村には赤タイ人とカドゥー人が共生し、通婚もしている。村の共通語は赤タイ語である。モークワン・カドゥー語をしる人は、40 代以上の数名にかぎられるようである。他のモークワン・カドゥー語地域との交流はない。まれに西部方言地域からの来訪者があるのみであるという。

3.2　諸方言の特徴

モークワン・カドゥー語諸方言は相互によくにており、おそらく相互理解が可能である。ただし、次にのべるような相違点がみいだされる。

南部方言については、話者が言語をかなりわすれているために、資料がすくない。少数の資料の中では、‘mother’ に相当する語彙が、他の諸方言とはことなっている。

(8) ‘mother’ 南 ʔəní; 北・北西・西 ʔəmɛ; 東 ʔəmè cf. Cak ʔanúɪ

北部方言と西部方言は相互によくにているけれども、一部の語彙について l と n の交替がみられる。

(9) a. ‘python’ 北 ləmàuʔ, 北西 ləmàʔ, 西 nəmàuʔ, 東 nəmɔ̀
b. ‘son-in-law’ 北・北西 lùʔkʰwé, 南 lòuʔkʰwé, 西 nòuʔkʰwé, 東 nùʔkʰwé
c. cf. ‘take’ 北・北西・西・南・東 la=ma

西部方言では、他方言と比較すると、よりガナン語にちかい形式が確認されることがある。

(10) a. ‘head’ 西 hə́láŋhòuʔ, 南・北 hə́láŋ, 北西 hə́láŋhùʔ, 東 hə́láŋhùʔ ～ hə́láŋ cf. ガナン hə́láŋhŋ̀ʔ
b. ‘must’ 西 tʰa ～ tʰɔ, 南・北・北西・東 tʰa cf. ガナン tʰɔ

北西部方言は、基本的には北部方言ともっともよくにている。ただし、動詞の非未来述部標識の形式が、一貫して=ma である。他方言では、動詞の語末子音が-t/n のときは=na、それ以外のときは=ma である。

(11) ‘love (vt)’ 北西 mít=mà; 北・西・東・南 mít=nà

本発表で中心的にあつかう東部方言に特徴的な語彙としては、カドゥー人の自称がある。

(12) ‘Kadu (autonym)’ 東 zàʔ; 南 ʔəsàʔ; 北・北西・西 mɔ

4　有声阻害音のあらわれ

カドゥー語諸方言においては、一般的に有声阻害音は音素的ではない。しかし、（1）でしめしたように、ルイ祖語の入破音に由来するものは、モーラン・カドゥー語では有声閉鎖音で対応している。そしてモーラン・カドゥー語は、有声閉鎖音が音素化している点が、他のカドゥー語諸方言と顕著にことなる点である。

ところで、カドゥー語諸方言では母音間やビルマ語からの借用語において有声阻害音が音声的には異音としてきかれうる。Sangdong［2012］や発表者の解釈では音素的ではないけれども、ふるい資料では有声で記録されている。

(13) a. ‘bazar’ セットー /sé/ [sé] ～ [zé] < ビルマ語 zé
b. ‘moon’ Brown sʿədɑ`, Sangdong sətá, セットー /sʰətá/ [sʰədá] ～ [sʰətá]

このように、カドゥー語諸方言において有声阻害音がきかれうるのは一般的には母音間のみである。おなじことはモークワン・カドゥー語についてもあてはまる。

だが、モークワン・カドゥー語東部方言では、（14）にしめすように、語頭でも有声阻害音がきかれうる。

(14) a. ‘grill’ 東 gá vs 南・北・西・北西 ká cf. ‘be hot’ 東 ká
b. ‘vomit’ 東 jɛ́ vs 南 ʔəcɛ́ ～ ʔəkɛ́, 北・西・北西 cɛ́ cf. ‘buffalo’ 東 cɛ́

ここで（13）に提示した語彙を他方言もふくめて比較すると、（15）のようになる。

(15) a. ‘grill’ セットー ʔəká, モーラン ká
b. ‘vomit’ セットー ʔəcɛ́, モーラン ʔəcé ～ cɛ́

（14）と（15）を比較すると、前者には接頭辞がない傾向にあり、後者にはある傾向にある。同様の傾向は自称についてもみられた。（16）に他方言の例もふくめて再掲する。

(16) ‘Kadu (autonym)’ 東 zàʔ; 南 ʔəsàʔ; 北・北西・西 mɔ; セットー・モーラン ʔəsàʔ

一般にセットー・カドゥー語やモーラン・カドゥー語、東部方言以外のモークワン・カドゥー語では接頭辞 ʔə-に後続する無声無気阻害音は有声化しない。他方、モークワン・カドゥー語東部方言においては、他方言における母音間の無声無気阻害音が有声化する傾向がある。したがって、本来あった接頭辞 ʔə-とのあいだで無声無気閉鎖音が有声化し、接頭辞が消失あとも、有声閉鎖音としてのこったのではないかと推測される。

さらに、東部方言では、標準ビルマ語と同様に[注5]、母音間の無声無気音が有声化するとともに、語頭の接頭辞も有声化する。（17）に他方言と比較した例をしめす。

(17) a. ‘see’ 東 gədùŋ=ma, 北・西 kətòuŋ=ma, 北西・南 kətùŋ=ma; セットー・モーラン kətùŋ=ma
b. ‘calf (of body)’ 東 dəbáuʔ, 北・西・北西・南 təpáuʔ; セットー・モーラン təpáuʔ

5 おわりに

以上、本発表ではカドゥー諸語をまず分類した。さらにモークワン・カドゥー語の方言分類もこころみた。そして有声阻害音が音素化している点が、モークワン・カドゥー語東部方言の特徴であることをしめした。

有声阻害音そのものはカドゥー諸語一般に異音としてはきかれうる。これまでの発表者による調査では、モーラン・カドゥー語においては祖語の入破音が対応する有声阻害音であらわれるという例は確認していた。しかし、祖語の入破音とはかかわりなく、接頭辞消失の残滓として語頭に有声阻害音があらわれる方言は、モークワン・カドゥー語東部方言にしか確認されていない。さらに、標準ビルマ語にみられるような、語頭の

注5 たとえば ‘language’ は文語ビルマ語では <ca-kaa:> であるけれども、標準ビルマ語では zəgáとなる。なお、おなじ単語がビルマ語アラカン方言の変種であるマルマ語では cəgáである。母音間の無声閉鎖音は有声化するけれども、語頭にまで波及しない。

無声無気阻害音の二次的な有声化も、モークワン・カドゥー語東部方言に確認された。

モークワン・カドゥー語東部方言地域は、ビルマ語地域と隣接しており、ビルマ語の影響により、有声阻害音が音素化しているのではないかと推測される。

カドゥー語話者はすでにほとんどの話者がビルマ語との二言語使用者であり、カドゥー人でありながらカドゥー語をはなせない人も多数いる。有声阻害音の音素化は、やがてうしなわれるであろうカドゥー語が、きえゆく前にみせる姿のひとつをしめしているようにもおもわれる。

附録・カドゥー語の音韻体系

以下にセットー・カドゥー語に代表されるカドゥー語の音韻体系をしめす。() にいれたものは、モーラン・カドゥー語やモークワン・カドゥー語東部方言で音素になりうる有声阻害音である。

子音

p p^h (b)	t t^h (d)	c [t] c^h (j)	k k^h (g)	ʔ
m	n		ŋ	
		s s^h ɕ (z)		
w	l	y		

母音

i		u
e	ə	o
ɛ		ɔ
	a	

参考文献

藤原敬介. 2012a.　「ガナン語音韻論」『大阪大学世界言語研究センター論集』7: 122–144.

藤原敬介. 2012b.　「ルイ祖語の再構にむけて」『京都大学言語学研究』31: 25–131.

藤原敬介. 2013.　「カドゥー語音韻論」『東南アジア研究』51(1): 3–33.

藤原敬介. 2014.　「ルイ祖語の再考」『京都大学言語学研究』33: 1–32.

藤原敬介. 2015.　「カドゥー語諸方言におけるモークワン・カドゥー語の位置について」『日本言語学会第 150 回大会予稿集』: 326–331.

Brown, R. Grant. 1920.　The Kadus of Burma. *Bulletin of the School of Oriental Studies* 1(3): 1–28.

Huziwara, Keisuke. 2016.　*Cak-English-Bangla dictionary: a Tibeto-Burman language spoken in Bangladesh*. Dhaka: A H Development Publishing House.

Sangdong, David. 2012.　A grammar of the Kadu (Asak) language. Ph.D. dissertation, La Trobe University.

Scott, Geroge J. 1900.　*Gazetteer of Upper Burma and the Shan states, Part 1, Vol. I*. Rangoon: Printed by the Super-intendent, Government Printing, Burma.

Sao Tern Moeng. 1995.　*Shan-English Dictionary*. Kensington, Maryland: Dunwoody Press.

（附記）

本発表は科学研究費補助金（課題番号 16K02691）による研究成果の一部である。